

# 終止形連体形統合と二段活用的一段化

坪井美樹

## 0. 本稿の基本的視点と見通し

用言の活用体系の変遷を、活用 of の型の単純化と、各活用形態の示差性の実現という二つの原理に貫かれた出来事として捉え、終止形連体形統合や二段活用 of の一段化といったそれぞれの出来事についてその歴史的な意義を記述することを目的とする。本稿とそれに続く考察を通じて具体的には次の出来事ないしテーマが右 of の基本的視点から論じられる。

終止形連体形の統合

二段活用 of の一段化

活用形としての音便形の成立

上代特殊仮名遣い of の消滅が活用体系に与えた影響

## 1. 本稿で取り扱う対象と範囲

本稿では、動詞活用体系における終止形連体形統合と二段活用 of の一段化について論ずる。時代的には平安時代以降現代までが考察 of の範囲となる。

中古期 of の活用形式（四段・上一・上二・下一・下二・カ変・サ変・ナ変・ラ変 of の九種類）に比して現代 of の活用

形式（五段・上一・下一・カ変・サ変の五種類）は活用の型の数が減じ単純化している。現代にまで残った変格活用二つについては暫くおくとして、この動きを一言で言えば、母音変化方式（五段△四段▽活用）と語尾添加方式（一段活用）への二極分化と言える。中古期以降でこの根本的な骨組みを実現した出来事が終止形連体形の統合と二段活用の一段化である。従来もこの二つの出来事の結果、活用の型が減少し、単純化されたことは指摘されてきた。しかし、この二つの出来事の原因は、それぞれ別個に論議されてきたし、その変化の結果が活用体系に何をもたらしたかの考察も充分ではなかったように思われる。筆者はこの二つの出来事は別々の事情からたまたま相前後して起こった出来事ではなく、むしろ活用体系そのものに内発的な体系整備の動きであり、ともに同一の方向性に導かれた連動した出来事と見るべきものであると考える。その同一の方向性とは何か。筆者はまず、この大きな動き（終止形連体形統合と二段活用の一段化）が、ともに、活用形式の単純化だけでなく、個々の動詞がそれぞれの活用形とする具体的な形態の示差性（以下単純に「形態の示差性」と呼ぶ）を増す動きでもあったことを指摘したい。このことは従来の日本語史の記述でもあまり注視されていないように思われる。しかし、形態の示差性の増加は、活用形式の単純化（活用の型の減少・二極分化）と表裏をなして活用体系変遷の基調をなす重要な要因であると筆者は考えるのである。

## 2. 動詞活用体系における「形態の示差性」について

### 2-1 形態の示差性とは何か

筆者は、平安時代以降現代に至るまでの活用体系の変遷が、活用の型の単純化と同時にそれぞれの活用の形態の示差性を増すものであることに重要な意義を見いだすのであるが、ここで筆者の言う「形態の示差性」について動詞活用体系に即して説明を加えたい。ここでいう形態とは、それぞれの動詞がそれぞれの活用形とするまさに具体的な外形である。そして、示差性というのは、個々の動詞が各活用形とする外形が、その属する活用の型（四段とか上二段とか）によってどれほど独自の形をとっているかどうかということである。個々の動詞が、所

属する活用型によって、各活用形で示す形態のバラエティーと言ってもよい。或る一つの活用形の形態からその動詞の所属する活用型が他に対してどれほど示差的（或いは弁別可能的）であるかどうかは、形態の示差性が大きい小さいにかかっている。

具体的な例を挙げて述べよう。平安時代の動詞活用体系における終止形は、ラ変を除けば、どの活用型に属する動詞でも同じような形態をとる。いわば、終止形において動詞は無個性である。

置く 立つ 切る 起く 落つ 懲る 懸く 捨つ 荒る 得（う） 経（ふ） 見る 着る 蹴る

来（く） 為（す） 死ぬ

と並べたててみても、その形態だけからその動詞の所属する活用型を確定できない。平安時代の動詞終止形はラ変を除く全ての活用型において

語幹＋○（活用語尾子音）ー

または、

○（単音節動詞子音）ー△△はりの場合もある

の形をとるからである。単音節動詞は多数の複音節動詞にくらべて形態的に特徴的であるが、それでも単音節動詞が所属する活用型を終止形の形態だけから決定することはできない。また、とりわけ、四段・上二段・下二段（複音節）相互においては示差性が小さいと言えるだろう。

しかし、否定の形や推量の形、つまり未然形では、活用型によってそれぞれの形態は特徴的である。

置かず 立たず 切らず 死なず

： 起きず 落ちず 懲りず 見ず 着ず

： 懸けず 捨てず 荒れず 得（え）ず 経（へ）ず 蹴ず 為（せ）ず

： 活用語尾が母音イで終わる（上二段・上一段活用）

： 活用語尾が母音エで終わる（下二段活用・下一段活用・サ変活用）

： 活用語尾が母音アで終わる（四段活用・ナ変活用）

来 (こ) ず

… 〇 活用語尾が母音オで終わる (カ変活用)

右のことから、筆者の言う「形態の示差性」という概念を使って次のように言うことができる。「平安時代の動詞活用体系において、終止形と未然形とを比較してみると、終止形では形態の示差性が小さく、未然形では形態の示差性が大きい」と。

次に、右に掲げた動詞の現代語の終止形を見てみよう。

置く 立つ 切る 起きる 落ちる 懲りる 懸ける 捨てる 荒れる 得 (え) る 経 (へ) る 見る

着る 蹴る 来る 為 (す) る 死ぬ

ラ行五段活用の動詞 (右に掲げた動詞では「切る」「蹴る」) を除外して見れば、基本的に次のような形態的特性の分布が成立していることがわかる。

置く 立つ 死ぬ

… ㄣ 活用語尾が (ル以外の) 母音ウで終わる (五段活用)

起きる 落ちる 懲りる 見る 着る

… ㄣ 活用語尾が母音イを介してルで終わる (上一段活用)

懸ける 捨てる 荒れる 得 (え) る 経 (へ) る

… ㄣ 活用語尾が母音エを介してルで終わる (下一段活用)

来る 為 (す) る

… ㄣ 活用語尾が母音ウを介してルで終わる (カ変活用・サ変活用)

ラ行五段活用動詞が語幹末母音に依じて右の五段活用以外の動詞と同じタイプになり得る点では、形態の示差性にとってマイナスであるが、しかし、平安時代の終止形において四段・上二段・下二段が示差的な外形をとらないのに比べると、はるかに多くの動詞がそれぞれの所属する活用の型に依じて示差的な外形をとっていると言える。したがってまた、「形態の示差性」という概念を使って次のように言うことも可能であろう。「平安時代の

終止形と現代の終止形とを比較してみると、平安時代の終止形では形態の示差性が小さく、現代の終止形では形態の示差性が大きい」と。

以上に述べたことには別段新しい事実の指摘はない。むしろ、誰もが知っているあたりまえの事実である。ただ、筆者の「形態の示差性」の観点の提示のためにあらためて述べたにすぎない。断っておきたいのは、筆者の使う「形態の示差性」なる概念は、あくまで活用の型を異にする動詞の活用形態相互に関する概念であることである。異なる意味の個々の動詞が同じ形態をとるかどうかという、いわゆる同音異義語の問題ではない。また、四段活用動詞の終止形と連体形とが同じ形態をとるかどうかというような一つの動詞活用型の内部の活用形相互の問題でもない。

## 2-2 平安時代と現代との違い

さて、それでは、平安時代の活用表と現代の活用表とを形態の示差性の観点から全般的に比較してみよう。各活用の語尾部分を次のような表にして示す。

### ◎平安時代

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段活用	-a	-i	-u	-u	-e	-e
上一段活用	-i	-i	-iru	-iru	-ire	-iyo
上二段活用	-i	-i	-u	-uru	-ure	-iyo
下一段活用	-e	-e	-eru	-eru	-ere	-eyo
下二段活用	-e	-e	-u	-uru	-ure	-eyo
カ変活用	-o	-i	-u	-uru	-ure	-o(yo)

サ 変 活 用	-e	-i	-u	-uru	-ure	-eyo
ナ 変 活 用	-a	-i	-u	-uru	-ure	-e
ラ 変 活 用	-a	-i	-i	-u	-e	-e

一部前節で述べたことの繰り返しにもなるが、右の表から容易にうかがえる主な点を列挙する。

- ・終止形において、四段・上二段・下二段・カ変・サ変・ナ変が形態上の示差性を持たない。
  - ・連体形・已然形において、上二段・下二段・カ変・サ変・ナ変が形態上の示差性を持たない。
  - ・連用形において、四段・上二段・上二段・カ変・サ変・ナ変・ラ変が形態上の示差性を持たない。
- 右のほか、それぞれの活用と同じ語尾形態を示すところが多いが、今は余り話を複雑にしないためにいちいち列挙することを省略する。

◎現代

	未然形 <sup>(1)</sup>	連用形 <sup>(2)</sup>	終止形	連体形	仮定形	命令形
五段活用	-a	-i	-u	-u	-e	-e
上一段活用	-i	-i	-iru	-iru	-ire	-iro
下一段活用	-e	-e	-eru	-eru	-ere	-ero
カ変活用	-o	-i	-uru	-uru	-ure	-oi
サ変活用	-a	-i	-uru	-uru	-ure	-iro

平安時代の活用表と現代の活用表とを比較してみると、現代の活用体系の方が形態の示差性の増しているのが歴然とするであろう。現代の活用体系では、それぞれの活用形において、動詞はその所属する活用のに応じた形態的特性をはるかに多く持っている。変格活用を除けば、共通の形態的特性を持つ唯一の例外は、連用形における五段活用（原形）と上一段活用の場合だけである。

このように、全般に形態の示差性は、平安時代の動詞活用体系では小さく、現代のそれでは示差性が大きい。形態の示差性の増大は、活用のに減少・単純化と対になる活用体系の歴史の変遷の事実としてもっと重視すべきである。筆者が本稿で主張したいことは、畢竟この二つの原理の重要性であり、終止形連体形統合も、二段活用の一段化も、擬人法的な表現を使えば、この二点の実現を目指して活用体系が行った変身の過程として記述し得るとというのが筆者の考えである。

### 3. 終止形連体形の統合

#### 3-1 統合のメリット

活用の型の減少と形態の示差性の増大の流れの中に終止形連体形統合の動きを見た時、活用体系そのものにとって統合はどのようなメリットを持っていたのだろうか。

同化以前の活用体系では、四段・上二段・下二段の終止形が全て

語幹+Cr (C=活用語尾子音)

の形となっていた。終止形に限らず一般的に言って、活用の型によって特異な形態を持っていたほうがその動詞がどのような活用の型に所属するかが明らかであり、従ってまたその動詞の他の活用形態を類推しやすい。そしてそのほうが語を習得してそれを運用するに便利であったはずである。

次のような例を考えてみよう。

「つく（付・着）」には四段活用の自動詞と下二段活用の他動詞が存在する。この語が示す活用形態は、

つかず つきたり つく つく時 つけども つけ(四段・自動)  
 つけず つけたり つく つくる時 つくれども つけよ(下二段・他動)  
 のように終止形を除いてその文法的性質の違い(自動↕他動)が形態上に明らかである。しかし、終止形では、例えば、

心つく。 心つくべし 心つくらむ …

のような表現では「心」と「つく」の文法的関係は場面・文脈によらざるをえない。終止形連体形の統合は、一方(下二段・他動)の終止形を「つくる」とすることによって、他方(四段・自動)の終止形と形態的に異なる姿とし、終止形におけるこのような不都合を解消したのである。<sup>(3)</sup>

### 3-2 終止形と基本形

一口に終止形といっても、その形が使われる用法には大別次の三種がある。

- ・ 何ものをも下接せず、文末の終止に用いられる
- ・ 「べし」「らむ」「や」などのいわゆる終止形接続の助動詞・助詞を下接する
- ・ その語の基本形として用いられる

「基本形」というのは、つまり我々が普通に『動詞「行く」の意味』とか『動詞「歩く」の活用』というように使うその語の代表の形、文中に運用された語の具体的姿を離れた抽象的な語の形態である。いわば英語の不定形に比することが出来るものといえる。日本語では文終止に使われる形がすなわち「基本形」である、ということがあまりに当たり前のこととしてとらえられているため、通常あらためて指摘されることもないのだが、終止形連体形統合は、ただに文の終止に現われる形が変わったのではなく、本質的には基本形が活用の型に対応して形態上の特徴を獲得したできごとなのである。

先に動詞「つく(付・着)」について、終止形連体形統合以前は、自動詞であるか他動詞であるか形態から区別ができないという趣旨の言い方をした。しかし、本当は、自動詞と他動詞の文法的性質においての同音異義語



が存在したかのようなこの言い方は恐らく正しくない。平安時代の言語主体にとって、「つく」は「つく」として一語で、基本形としての「つく」は自動・他動についてニュートラルであつたものであろう。ただ、その「つく」が実際に種々の接続関係の中で運用される際に、自動・他動それぞれの文法的意味を含んで、時に四段、時に下二段に活用させられたのである。このような語の場合、終止形連体形統合の結果、基本形に「つく」と「つくる」の差異が生まれることによって自動詞・他動詞の二つの動詞へと分かれたとも見ることができるのである（これは、同時に自動・他動という文法範疇の一層の確立でもあつたのではないだろうか）。

### 3-3 統合が生む不都合

終止形と連体形が同一の形態となるそのこと自体にさしたるデメリットはなかつたであらう。いったん同じになつてしまえば、それは、推量の助動詞に続く形と否定の助動詞に続く形が同じ未然形の形であることが特に不都合でないということと基本的に変わらない。なにより、動詞の最大勢力である四段動詞が本来終止・連体同形であるのだから、統合に対する抵抗は少なかつたはずである。<sup>(4)</sup>

とはいえ、終止形による通常の文終止に対して連体形による文終止が強調表現としてあり、その表現性の違いを形態の違いによって明示的に示すという役割は、確かに終止形連体形統合によって失われたであらう。従来の終止形連体形統合の原因説明には、この連体止め（準体法）の強調表現（余情表現と呼ばれることもある）の普及・一般化の結果、通常の終止形終止を駆逐した、というような説明が多くなされてきた。<sup>(5)</sup>しかし、このような考えがどれほどリアリティを持つのか、筆者には疑問に思われる。

その疑問の一つは、このような従来の考え方が、平安時代の書記言語の様相にとらわれすぎているのではないかということである。確かに、平安時代の物語などを読むと、一般的多数の終止形終止文や係結び文の中にたまたにいわゆる連体形終止文が見られ、それらの多くが強調的な表現になっているし、和歌などにも連体形終止が余情表現として現われることそのことに間違いはない。しかし、移り行く生きた言語の本流である口頭言語においてはどうかであつたのだろうか。現代の我々の口頭言語と書記言語における文終止の有りようのはなはだしい違い

を考える時、その違いは平安時代においても同様であったはずだと考える方が自然ではないだろうか。口頭言語において文の終止は、書記言語の文のように整った姿で終わるのではなく、多くは要するに発話の断止によって終わるのであり、強調・余情などの情報は、イントネーションやプロミネンスやその他の言語外的な要素に、より多く担われている。平安時代にあっても、感情的価値についてニュートラルな終止形終止などは、通常の口頭言語においてむしろその出現は稀であったのではないか。終止形による文終止は、書記言語を通じて考えられるよりも、口頭言語においてははるかにその機能負担は小さかったと考えるべきであろう。

要するに、書記言語における状況をもとにして、口頭言語においても連体形終止が表現として愛好されることによって次第に終止形終止を駆逐する、というシナリオを想定するのは素朴に過ぎるのではないかというのが筆者の疑問なのである。平安時代における書記言語での終止形終止は、係結び文の文末が連体形または已然形によって文末として有標であったように、まさに感情的価値についてニュートラルな文末標示として有標な形態であったと考えられるのである。それに対して、そしてそれとは異なつて、口頭言語での終止形終止は、ニュートラルな一般的終止ではなく、むしろ書記言語的で固い古風な文体的価値を持っていたであろうと思うのである。<sup>(6)</sup>

従来の終止形連体形統合の原因に関する説明に対して疑問に思われることの第二は、従来の考え方があまりに終止形・連体形という枠組みとその名称にとらわれているのではないかという点である。<sup>(7)</sup> 前述のように、終止形連体形統合は、ただに文終止に現われる形の変化ではなく、動詞の「姿」そのもの、基本形の変容なのである。

多くの動詞が、自らの所属する活用の型（四段系列・二段系列・一段系列）を、終止形連体形統合によって形態上に標示することとなったのである。また、自動・他動という文法範疇に対してニュートラルな動詞「つく」に替わって、自動詞「つく」・他動詞「つくる」（後に「つける」）の二つの動詞が生まれたということなのである。

つまり、終止形連体形統合の主たる原因は、連体止めの愛好などではなく（たとえそれが事実として脇から統合を支えたにしても）、活用体系そのものに内発的な形態の示差性増大の要求に求めるほうが、後の二段活用的一段化と統一的に考えることができ、活用体系の歴史的変遷の方向性を明らかにする上で有効であると筆者は考

えるのである。

なお、一言付け加えるならば、終止形連体形統合がなぜ連体形の方の形に収斂したのか（言い換えれば、なぜ終止形の方の形が連体形として使われなかったのか）という問いに対する答えは、この変化を上述のように形態の示差性増大の動きと見る立場から自ずと明らかであろう。言うまでもなく連体形の形の方が形態の示差性を保障するからである。

#### 4. 二段活用的一般化

##### 4-1 一段化の意義

二段活用的一段化は、活用の型を母音変化方式と添加方式の両極に分化・単純化した動きである。また、本稿において重要な点として指摘したいのは、二段活用的一段化が、終止形連体形統合と連動する動きであって、個々の動詞活用形の形態の示差性を増大させる変化であることである。

平安時代の上二段活用と下二段活用は、第二節の表で示されるように終止形・連体形・已然形において共通する形態を持っている。しかし、一段化によって *ru* の添加する母音がそれぞれ *i* または *o* に固定したために形態的な違いは際立たせられることとなった。

##### 〔終止形〕

##### (四 段)

*ru* → *ru* → *ru*

##### (上二段)

*ru* → *uru* → *iru*

##### (下二段)

*ru* → *uru* → *eru*

##### 〔連体形〕

##### (四 段)

*ru* → *ru* → *ru*

##### (上二段)

*ru* → *uru* → *iru*

(下二段) -uru → -uru → -eru  
 「已然形」

(四 段) -e → -e

(上二段) -ure → -ire

(下二段) -ure → -ere

この結果、上二段と下二段の所屬動詞がその全ての活用形において形態的な示差性を持ち、上二段と下二段で自動・他動の対を持つ動詞も、全ての活用形において自動詞・他動詞独自の形態を持つことができるようになったのである。

のぶ(延・伸) ↓ のびる「自動」↑↓のべる「他動」  
 いく(生・活) ↓ いきる「自動」↑↓いける「他動」

「ただし右の二語は、実際の語史においては、それぞれ使役他動詞の形(のばす、いかす)を生み、本来の他動詞が一段化した形は、意味的にも本来に別語となってしまうたのであるが」

#### 4-2 従来の説明

先に二段活用の一段化は、終止形連体形統合と連動する変化であるといった。筆者のようにこの二者を共通する原理による変化とみるのではなくとも、終止形連体形統合が二段活用の一段化をうながしたとする見方は、従来も提出されてきた。

終止形連体形統合以前の二段活用の活用語尾は、母音変化と語尾添加の両方の性質を示す。今、例として上二段動詞「起く」一語をとりあげて論ずるが、下二段動詞でも事情は同じである。「起く」の活用を示す。

おき=ず      おき=たり      おく=      おくる=時      おくれ=ば      おきよ=!

-i      -i      -u      -uru      -ure      -iyo

ここでは未然形・連用形の語末「i」と終止形語末「u」とが母音変化による対立を示している。

しかし、終止形連体形統合の後では、

おき＝ず      おき＝たり      おくる＝。      おくる＝時      おくれ＝ば      おきよ＝！

—i      —i      —uru      —uru      —ure      —tyo

となり、終止形語末が「ru」で覆われるために母音「i」と「u」の対立が活用形の形態変化として重要でなくなってしまうのである。かくて「おき」okiと「おく」okuとの差異の存在は無用となり、添加語尾の助けを借りずに未然形・連用形の語尾としてあった「おき」okiの形が、この動詞の自己同一性 (identity) を示す固定部分となったのである。

二段活用的一段化に関する従来の多くの説明は、まず単音節二段活用動詞が語幹保持の欲求から一段活用に類推されて一段化し、ついで複音節二段動詞が右の母音の差の重要度の低下にうながされて単音節二段動詞を追い掛けて一段化した、というふうになされてきたと思われる。これに対して、《柳田1985》は、母音の違いが意味を持たなくなったのは、あくまで背景となった条件であって、このことがただちに複音節二段活用動詞を一段化させたとは考えにくいとして、次のような考えを提示している。

すなわち、ハ・ワ行の転じたものを含むヤ行二段活用動詞（語幹末母音「a, o」のもの）に

aje, -oje ∨ -ai, -oi      -aju, -oju ∨ -ai, -oi

の音韻変化が起こり、例えば

kaje kaje kajuru kajuru kajure kajejo

が

kai kai kairu kairu kaire kaijo

のようなかたち（上一段活用）へ転じようとする動きが起こったが、ここにもともと下二段活用であるという意識が働いて、

kae kae kaeru kaeru kaere kaejo

のようなかたち、つまり下一段活用となり、これが他の複音節二段活用動詞にも及んだというのである。<sup>(8)</sup>

右の説明において、いったん上一段のようなかたちに転じようとしてそこにもとと下二段だという意識が働いた、というところが筆者にはリアルに想定できない。また、ヤ行にそういう変化が起こったにしてもそれが他の行に及んだ理由が依然として明確でないように思われる。ただ、▲柳田1985Ⅴの考えの根底には、母音の広狭による音韻変化の法則があり、二段活用の一段化に関する考え方を批判するにも、根本的にはこの音韻変化の法則そのものの妥当性及び法則適用の適否を問うべきであろう。今筆者にはそれだけの準備が残念ながら無いので、筆者自身の考えと対置して識者の判断にまかせることとしたい。

#### 4-3 上一段と下一段

さて、二段活用の一段化の結果生まれた上一段動詞と下一段動詞をくらべてみる。上一段動詞の活用は、つぎのように示され、

-i                    -iru                    -ire                    -iyo(-iro)  
 下一段動詞の活用は、次のように示される。

-e                    -eru                    -ere                    -eyo(-ero)  
 この-iと-eの対立が「いきる」と「いける」のような形態の示差性を生んだのであるが、しかし、それぞれ-iと-eの部分まではあらゆる場合に固定的であるのだから、「語幹・活用語尾」という用語は文法論上議論があり得るので避け、ここでは固定部分と語尾と仮に呼んでおくが「未然形・連用形を語の固定部分に0(ゼロ)の添加語尾からなるものと考えれば、上一段動詞も下一段動詞も畢境次のような

-0                    -0                    -ru                    -ru                    -re                    -yo(-ro)

一つの活用の型に収斂する。固定部分末尾母音-iと-eの対立は、いわばこの型に所属する動詞の下位分類に過ぎない。つまり、語幹や活用語尾の認定の整合性という文法論上の問題は別として、現代の我々が習得する動詞活用の型は、五段と一段、それに二つの変格活用の四種類、変格活用を別にすれば、要するに母音変化方式と添加方式の二種類なのである。そして、これだけ活用の型を減少・単純化すると同時に活用形の具体的な形態の

一つ一つがそれぞれの所属する活用の型によってできるだけ独自の形をとること、即ち形態の示差性を求めた変化が、終止形連体形の統合であり、二段活用の一段化だったのである。

## 5. おわりに

本稿では、活用体系の変遷に関する筆者の基本的な speculation をできるだけシンプルなかたちで提示することに努めた。そのため数多くの細かな詰めを欠いている論考であり、それは筆者の怠慢と力不足に違いはないのだが、個々の動詞の示した歴史の変遷や例外的事象にあまり目を奪われると、一方で歴史の大きな流れの意味を見失うことにもなりかねないことを恐れもしたのである。とりわけ、最も問題となるべき点は、動詞の活用体系にだけ話をしぼったことで、言うまでもなく終止形連体形統合は動詞だけでなく形容詞・助動詞にも起こった出来事なのであり、二段活用の一段化は助動詞にも起こったのである。しかし、最初からこれらの品詞も含めて考察することが本当に有効かどうか、これまた一概に言えないと筆者は思う。形容詞は、その活用体系をいわゆる補助活用として整備してきたことによる特殊性があると思うし、助動詞は、これまた辞化にともなう語形縮約の傾向という助動詞ならではの特殊性がその形態変化の要因に加えられねばならない。従って今は、動詞活用体系に限って、しかもその本質的な動きのみを焦点化するという方法をとったのである。「0. はじめに」の項で述べたように更に「活用形としての音便形」「上代の音韻体系と活用体系」についても本稿で提示した基本的立場から論じたいので、今一度個別的・例外的な細かな点について考えたいと思う。今は粗雑ではあるが筆者の基本的な考えを示して批評をおおぐ次第である。

## 引用文献

- ▲柳田1985『柳田征司『室町時代の国語』1985年9月東京堂出版  
主な参考文献

- ①『日本語の歴史』第4巻「移りゆく古代語」1963年7月・別巻「言語史研究入門」1966年6月 平凡社  
 ②松村明編『国語史概説』1972年5月 秀英出版  
 ③春日和男編『新編国語史概説』1978年2月 有精堂出版  
 ④沖森卓也編『日本語史』1989年3月 桜楓社  
 ⑤山内洋一郎『中世語論考』1989年6月 清文堂出版  
 ⑥『言語学大辞典』1989年9月 三省堂出版 第2巻 世界言語編(中)「日本語」の項

## 注

- (1) 点線で分けられた下段は意志・推量の助動詞に続く場合、上段はそれ以外の未然形である。  
 (2) 点線で分けられた下段はテ・タに続く場合、上段はそれ以外の連用形である。  
 (3) ここで述べたような理論的に考えられる不都合が、現実の言語生活の場面で実際に不都合として現われていたとは速断できない。むしろ生きた言語の常として現実のコミュニケーションの場面では紛らわしさを避けるために別な表現形式が自動的に選択されただろう。しかし、潜在的な不都合としてやはり解消できるならば解消されるべきものではあつたはずである。いわゆる自動・他動の対立とは異なるが、尊敬の補助動詞「給ふ」(四段活用)と謙譲の補助動詞「給ふ」(下二段活用)も、もし他の活用形の場合と同じように終止形においても自由に両者が使われたとしたら、かなり紛らわしかったに相違ない。実際には謙譲の「給ふ」の終止形の使用はなるべく避けられたらしく、一般に言われているように「源氏物語」などでも謙譲の「給ふ」の終止形と見られる例は極端に少ないのである。  
 (4) 終止形と連体形でアクセントが異なっているも、形態上の差異に比べれば二次的なものであつただろう。なお、動詞活用の成立に関して山口佳紀は、四段活用でもかつて終止形の「くと連体形の「く」に相違があつたと仮定しているが(山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』、たとえば、古代の日本語でそういう時代があつたとしても、平安時代の四段活用においては問題にならない。  
 (5) この点に関する既存の概説書類の記述を幾つか抜き書きして示す。  
 「日本語の場合、終止形の廃棄は、どのみち連体形をもってする終止法をよろこぶところのころ、その変化を導いた根源の力とみてやはり説明すべきである。」(参考文献①別巻225頁226頁)。  
 「連体形による終止法は、平板で無色な終止形による終止法と異なり、何らかの感動・余韻のこもった表現形式であつたが、これが広く行なわれるようになるにつれて、そのような特殊な性格が薄れ、単純な終止法に変質していったのである。これがやがて、連体形による終止形の駆逐という事態をひき起こし、重大な意味をもつに至るのである。」(参考文献②105頁)。



「この現象は連体形を下に持つ構文、即ち準体句の直接的表出であったと思われる。主語があれば「が」「の」を伴っていたので、この現象の一般化は、主格助詞で主格を明示する近代語化、論理化を助けたといえよう。愛好されるにつれて「は」「も」の文も連体形で終るようになり、地の文では助詞なしも多い。」（参考文献③170頁）。

「鎌倉時代には、次第に従来の終止形に代わって連体形で文を終始することが多くなりますが、これは係結びの終止の連体形ではなく、係結びによらない連体止め（文末準体句）の用法が広まったものと推測されます。」（参考文献④89頁）。

(6) この点につき、『枕草子』の次の例は、清少納言は「と」文字の有無をあげつらっているのだが、自ずと一方が終止形、他方が連体形であげられているところがきわめて象徴的である。

「なにごとを言ひても、「そのことさせんとす」「いはんとす」「なにとせんとす」といふ「と」文字を失ひて、ただ「いはむずる」「里へいでんずる」など言へば、やがていとわろし。」（『枕草子』ふと心劣りとかするものは）。

(7) 次のような推論は、もともと連体形であったということから、終止法に連体法の機能が持ち込まれているようにとらえられているが、賛同できない。「終止形の消滅、即ち、終止法のみを明瞭に示す語形がなくなり、連体法を兼ねる語形で文終止を示すということは、文の言い切り、断止の機能を弱め、次へ展開する機能を促したことになるはずである。切れそうで切れない日本語の連文構造の一つの源といつてよいだろう。」（参考文献⑤57頁）。

なお、次のように、余情表現の連体形による文終止を終止形連体形統合の根源とみるあまり、当時の精神的・文化的状況がその後の日本語史を決したかのようなとらえ方も筆者には信じ難い。

「平安朝のたおやめぶりの中で連体終止は愛用され、あまり愛用されすぎて、ついに肝腎の余情を失って、普通の終止形終止法と区別のないものになってしまったのであった。」（参考文献⑥「日本語の歴史文法」の項）。

(8) 引用文献30～32頁。188～191頁。